

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 28 日現在

機関番号：33109

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24792597

研究課題名(和文) 夫婦間の呼び方からの配偶者暴力予防システムの開発

研究課題名(英文) Prevention System to Detect Intimate Partner Violence based on Spousal Forms of Address

研究代表者

横谷 謙次 (YOKOTANI, KENJI)

新潟青陵大学・その他の研究科・准教授

研究者番号：40611611

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は二つある。一つ目は配偶者の呼び方(「あなた」)に基づいて配偶者暴力を予測することである。二つ目は子どもから親への呼び方に基づいて親子間葛藤を予測することである。横断調査の結果、夫が妻を横柄に呼ぶほど、夫は妻に対して身体的暴力を行い易かった。また、妻は夫を親密に呼ぶほど、夫から身体的暴力の被害を受け易かった。夫婦間の呼び方は、夫から妻に対する身体的暴力の予測指標として有用だろう。また、青年期の子どもが親を呼ぶのを回避している場合は、親子間で葛藤を体験し易かった。また、父親を横柄に呼んでいる子どもほど、子どもの抑うつ症状が高かった。子どもの呼び方も親子関係の指標として有用だろう。

研究成果の概要(英文)：The present study has two aims. The first aim is to predict intimate partner violence based on spousal forms of address (e.g., "Darling"). The second aim is to predict parent-child conflicts based on children's forms of address for their parents.

Cross-sectional data suggested that when a husband called his wife arrogantly, he was likely to abuse her physically. When she called him intimately, she was also likely to be abused by him physically. Spousal forms of address could be a useful index to predict physical intimate partner violence against women. Furthermore, adolescent children who avoided calling their parents were likely to experience conflicts in their parent-child relationships. The children who called their father arrogantly also reported more depressive symptoms than those who did not. Children's forms of address could be a useful index to reflect parent-child relationships.

研究分野：臨床心理学

キーワード：呼称 配偶者暴力 夫婦間コミュニケーション 親子間葛藤 抑うつ

1. 研究開始当初の背景

配偶者暴力は世界的な問題であり、世界保健機構の報告によれば、日本では既婚女性の32%が配偶者から身体的及び性的暴力の被害を経験している(Ellsberg, Jansen, Heise, Watts, & Garcia-Moreno, 2008)。配偶者暴力を受けた場合、身体的な被害だけでなく、自殺念慮などの精神的健康にも悪影響を及ぼす。そのため、配偶者暴力を予防することが社会的な課題である。

配偶者暴力を予防するためには、配偶者暴力を予測する必要がある。予測指標は数多く提案されているが(例えば、傷害事件での逮捕歴など) そのほとんどは逮捕歴のある配偶者暴力加害者を想定しているため、逮捕歴の無い配偶者暴力加害者には不向きである(Kropp & Hart, 2000)。そのため、これらの指標は逮捕歴が残るほどの加害者には適用可能であるが、逮捕歴をほとんど残さない加害者には適用し難い。

本研究では、配偶者暴力の予測指標として、夫婦間の呼び方(夫が妻を「おい」と呼ぶ)を取り上げる。家族内の呼び方は外部機関でも聞き取りが行い易く、かつ、家庭内暴力を表すことが報告されている(横谷・長谷川, 2008)。そのため、夫婦間の呼び方は配偶者暴力も予測し得るだろう。

また、親子間の呼び方も探索的に検討した。夫婦間の呼び方が配偶者暴力を予測するなら、親子間の呼び方も親子間葛藤(ケンカ)を予測する、と考えられる。また、そういった呼び方が子どもの精神的健康にも影響を与え、と考えられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は三つある。一つは配偶者の呼び方の固有の評価値を見つけることである。次に、その評価値に基づいて、配偶者暴力が予測できるかどうかを検証することである。最後に、同様の手法を用いて、親子間の呼び方と親子間の葛藤との関連を検討し、精神的健康との関連を検討することである。

(1). 配偶者の呼び方には固有の評価値が存在する

配偶者の呼び方は多様であるが、個々の呼び方には固有の意味があることが知られている(Brown & Gilman, 1960)。例えば、「てめえ」という呼び方は「お父さん」という呼び方よりも疎遠さや横柄さをより意味している、と考えられている。また、こういった意味づけは、評定者が異なっても、ほとんど変わらない(Wood & Kroger, 1991)。実際、日本人の親子間の呼び方はそれぞれで意味が異なることが示されており、親子間でその意

味が共有されている(Yokotani, 2012)。

本研究では、呼び方を親しみ(呼び手は聞き手と親しそうである)と横柄さ(呼び手は聞き手に対して横柄である)との2点から評価を行う。

仮説(1)- 配偶者の呼び方の評価値は呼び方の種類によって異なるだろう。

仮説(1)- 配偶者の呼び方の評価値は評価者間でほとんど異ならないだろう。

(2). 配偶者の呼び方は配偶者暴力を予測する。

研究1では、配偶者の呼び方がそれぞれ固有の評価値を持ち、その評価値は評定者に問わず一定であるということが示された。

研究2では、その配偶者の呼び方の評価値が実際の配偶者暴力を予測するかどうかを検討する。配偶者暴力だけでなく、夫婦間の非生産的なコミュニケーションも指標に入れることにより、配偶者の呼び方の予測の妥当性を検討する。

仮説(2)- 配偶者の呼び方の評価値は配偶者暴力を予測するだろう。

仮説(2)- 配偶者の呼び方の評価値は夫婦間の非生産的なコミュニケーションを予測するだろう。

(3). 親子間の呼び方と親子間の葛藤及び子どもの精神的健康

先行研究より、親を親族名称(父さん、パパ、など)で呼ばない子どもは呼んでいる子どもよりも親に対して会話の頻度が少なく、情緒的交流をしにくいことが分かっている(Yokotani, 2012)。加えて、特定の呼称で呼ぶことを拒否している(Avoidant address)場合も、暴力的になりやすいことが指摘されている(横谷, 2008)。

そのため、親を特定の呼び方で呼ばない子どもは親子間で葛藤を経験しやすいだろう。また、呼び方と葛藤が関連したならば、子どもから親への呼び方は子どもの精神的健康と関連すると考えられる。ここでは、一般的な抑うつ尺度を用いる。

仮説 3- 親を特定の呼び方で呼ばない子どもはそうでない子どもに比べて、親子間で葛藤を感じやすいだろう。

仮説 3- 子どもから親への呼び方は子どもの抑うつ状態と関連するだろう。

3. 研究の方法

本研究の方法は全て横断的質問紙調査である。

(1) 仮説(1)

仮説(1)- 及び仮説(1)-

調査協力者：調査協力者は二組から成る。一組目は161名の未婚者であり、大学1,2年生である。女性が45名、男性が116名である。平均年齢は19.0歳である。二組目は116名の既婚者であり、65名が女性、50名が男性である。平均年齢は54.5歳である。

質問紙：先行研究に基づいて36個の夫婦間の呼び方が選ばれた。初めの19個は妻から夫への呼び方(例、「あなた」)であり、後の17個は夫から妻への呼び方(例、「ねえ」)である。それぞれの呼び方を疎遠(1)と親密(7)及び、へりくだった(1)と横柄(7)の観点から評定した。

(2) 仮説(2)

仮説(2)-

調査協力者：調査協力者は36組の夫婦である(36名女性、36名男性)。平均年齢は58.7歳であり、平均結婚年数は29.4年である。

質問紙：最近3か月間で最も日常的に使用している夫婦間の呼び方を聞き取った(Yokotani, 2013)。また、配偶者暴力についてはConflict Tactics Scales-2 for couples (Straus, Hamby, Boney-McCoy, & Sugarman, 1996)の日本語短縮版(石井ら, 2003)を用いた。

仮説(2)-

調査協力者：131名の既婚者であり、76名は女性、55名は男性である。結婚年数は平均24.5年であり、家族人数は3.8である。

質問紙：日常的に夫婦間で使っている呼び方を聞き取った。また、夫婦間コミュニケーションについては夫婦間コミュニケーションパターン(Christensen & Sullaway, 1984)日本語版(横谷・長谷川, 2011)を利用した。

(3) 仮説(3)

仮説(3)-

調査協力者：329名の大学生であり、276名は女性、52名は男性、1名は性別情報を開示しなかった。平均年齢は20.0歳であった。

質問紙：日常的に家族で使用している呼び方をすべての関係(親子関係、きょうだい関係など)で聞き取った。

また、それぞれの関係で「罵り合ったり、喧嘩をしたりすること」の頻度を聞き取った。

仮説(3)-

調査協力者：226名の大学生であり、204名は女性であり、20名は男性であり、2名は性別を開示しなかった。

質問紙：最近3か月間で最も日常的に使用している親子間の呼び方を聞き取った。また、

CES-D抑うつ尺度(Radloff, 1977)の日本語版(Shima, Kano, Kitamura, and Asai, 1985)を抑うつ尺度として用いた。加えて、親子間の結びつきを確認するため、Parental Bonding Instrument(Parker, Tupling, & Brown, 1979)の日本語版(Kitamura & Suzuki, 1993)を用いた。この尺度では母親と父親それぞれの配慮ある関わりと支配的関わりが測定し得る。

4. 研究成果

(1) 仮説(1)

仮説(1)- 配偶者の呼び方の評価値は呼び方の種類によって異なるだろう。

図1に妻から夫への呼び方が表す親密さを、図2に夫から妻への呼び方が表す親密さをそれぞれ示す。図中の棒は平均値であり、線は配偶者の呼び方の標準偏差である。図1及び図2より、配偶者の呼び方はその種類によって評価値が異なる。仮説1-は支持された。

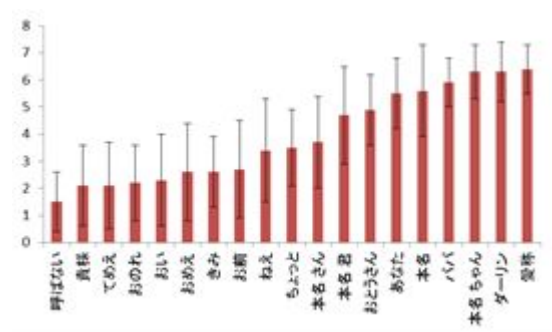


図1.妻から夫への呼び方が表す親密さ

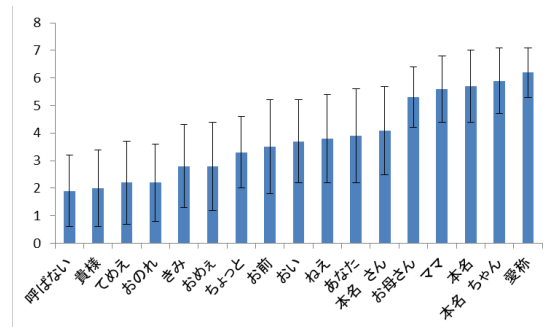


図2.夫から妻への呼び方が表す親密さ

仮説(1)- 配偶者の呼び方の評価値は評価者間でほとんど異なるだろう。

横柄さの評定値に関する大学生群と既婚者群との相関を図3と図4に示す。横軸が大学生の評定であり、縦軸が既婚者の評定である。また、図3は妻から夫への呼び方であり、図4は夫から妻への呼び方である。

図3及び図4が表すように、大学生の評定

値と既婚者のそれとは明らかに相関している（図 3 及び図 4 の級内相関係数はそれぞれ .95、.97 である）。

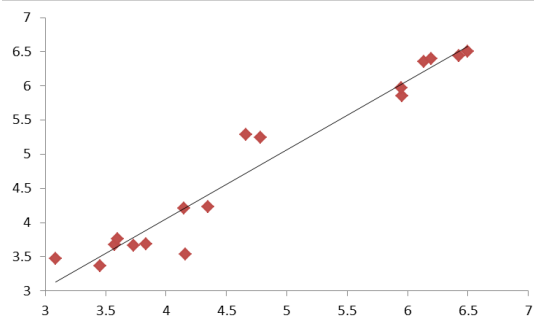


図 3 横柄さに関する大学生と既婚者の評定値：妻から夫への呼び方

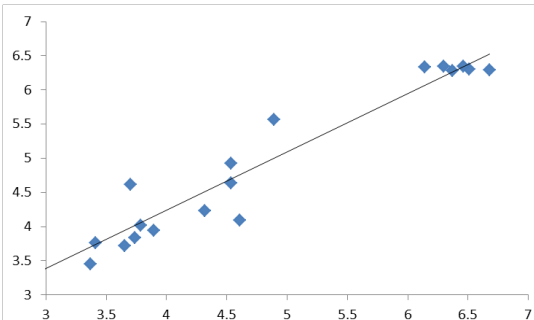


図 4 横柄さに関する大学生と既婚者の評定値：夫から妻への呼び方

(2) 仮説 (2)

仮説(2)- 配偶者の呼び方の評定値は配偶者暴力を予測するだろう。

呼び方による配偶者暴力の予測結果を表 1 に示す。夫から妻への呼び方は、横柄であればあるほど、夫から妻への身体的暴力を予測していた。この予測は夫の報告、妻の報告、及び両者を合わせた報告のいずれからも有意であり、一貫した予測が認められた。また、妻から夫への呼び方は親密であればあるほど、夫から妻への身体的暴力を予測していた。しかし、夫婦間の呼び方は心理的暴力を何も予測しなかった。

つまり、夫が横柄な呼び方をしており、かつ、妻が親密な呼び方をしている場合、身体的暴力が起こりやすい、と考えられた。ただし、この予測は身体的暴力のみであり、心理的暴力は含まない。

仮説(2)- 配偶者の呼び方の評定値は夫婦間の非生産的なコミュニケーションを予測するだろう。

呼び方による夫婦間コミュニケーションの予測結果を表 2 に示す。夫からの呼び方が横柄であればあるほど、妻の回避的なコミュニケーションは増加しやすく、また、生産的なコミュニケーションが減少しやすいこと

が分かった。

一方、妻からの呼び方は夫婦間のコミュニケーションを予測しなかった。

表 1. 配偶者の呼び方に基づく配偶者への身体暴力の予測

	夫報告		妻報告		夫婦報告	
	夫	妻	夫	妻	夫	妻
身体暴力	へ	へ	へ	へ	へ	へ
妻から親密さ	.58**	.58***	-	-	-	.39*
妻から横柄さ	-	-	-	-	-	-
夫から親密さ	-	-	-	-	-	-
夫から横柄さ	.80***	.80***	-	.41*	-	.58**
Adjusted R ²	.34**	.34**	-	.14*	-	.21**

注：***: $p < .001$, **: $p < .01$, *: $p < .05$

表 2. 配偶者の呼び方に基づく夫婦間コミュニケーションの予測

	妻報告		夫報告	
	生産的	回避的	生産的	回避的
妻から親密さ	-	-	-	-
妻から横柄さ	-	-	-	-
夫から親密さ	-	-	-	-
夫から横柄さ	-.34*	.32*	-	-
家族人数	.22	-	-	-
教育年数	-	-	.35*	-
Adjusted R ²	.17**	.08*	.10*	-

注：***: $p < .001$, **: $p < .01$, *: $p < .05$

(3) 仮説 (3)

仮説(3)- 親を特定の呼び方で呼ばない子

どもはそうでない子どもに比べて、親子間で葛藤を感じやすいだろう。

図5に親を呼ぶ子どもと呼ばない子どもとの葛藤頻度の差を示す。父親を呼ばない子どもは呼んでいる子どもよりも父子間の葛藤頻度が高かった。同様に、母親を呼ばない子どもは呼んでいる子どもよりも母子間の葛藤頻度が高かった。ここから、仮説3- は支持された。

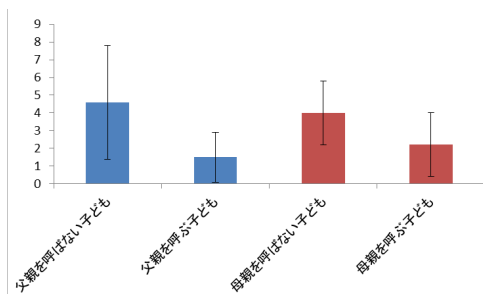


図 5. 親を呼ぶ子どもと呼ばない子どもとの間の葛藤頻度の差

仮説(3)- 子どもから親への呼び方は子どもの抑うつ状態と関連するだろう。

表3に親への呼び方による子どもの抑うつ症状の予測結果を示した。子どもから父親への横柄さ(呼び方に基づく)は子どもの抑うつと関連していることが分かった。一方、母親への呼び方は抑うつと相関していたが、他の変数を入れるとその関連は消えた。

表 3. 子どもから親への呼び方に基づく子どもの抑うつ症状

	<i>r</i>	β
父親への横柄さ	0.25**	0.25***
父親への親密さ	-0.13	-
母親への横柄さ	0.17*	-
母親への親密さ	-0.14*	-
父親の配慮	-0.17*	-
父親の支配	0.3**	0.3***
母親の配慮	-0.17*	-
母親の支配	0.25**	-
Adjusted R ²	.	16***

注: ***: $p < .001$, **: $p < .01$, *: $p < .05$

(4) 結果の要約及び考察

夫から妻への横柄な呼び方が夫から妻への身体的暴力を予測することが分かった。同

様に、この呼び方と妻の生産的なコミュニケーションの抑制とが関連することも分かった。ここから、夫から妻への偉そうな呼び方が夫から妻への身体的暴力を予測する指標となり得ることが示唆された。したがって、夫の呼び方に焦点を絞って話を聞けば、配偶者暴力は予測し易くなるだろう。

しかし、本研究は横断調査のため、因果関係は不明である。例えば、夫がこの偉そうな呼び方を改善することによって、身体的暴力の頻度が変化するかどうかは不明である。同様に、身体的暴力の変化に伴って、呼び方が変化するかどうかも不明である。この点については今後、無作為化試験を用いて、介入効果を検討する必要がある。

同様に子どもから父親への横柄な呼び方が子どもの抑うつ状態と関連することも分かった。しかし、この結果についても因果関係は不明である。そのため、この点についても無作為化試験を用いて検討する必要がある。

また、呼び方の予測の精度には性差の影響も見られたが、この点についても今後検討する必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5 件)

1. Yokotani, K., Japanese Young Adults' Disrespectful Forms of Address for Fathers Predict Feelings of Rejection and Depression. *Names: A Journal of Onomastics*, 63, 2, 152-164, 2015. 査読有. DOI: <http://dx.doi.org/10.1179/0027773815Z.000000000112>
2. Yokotani, K. Links between spousal impolite forms of address and intimate partner violence against women. *Journal of language and social psychology*, 34, 2, 213-221, 2015. 査読有. DOI: [10.1177/0261927X14551610](https://doi.org/10.1177/0261927X14551610)
3. Yokotani, K. Avoidant Addresses in Japanese families reflect family conflicts. *Psychology of language and communication*, 17, 1, 65-77, 2013. 査読有.

<http://www.degruyter.com/view/j/plc.2013.17.issue-1/plc-2013-0004/plc-2013-0004.xml>

4. Yokotani, K. Husbands' forms of address for wives predict intimate partner violence against women. *International Journal of Brief Therapy and Family Science*, 3, 1, 1-13, 2013. 査読有.
5. Yokotani, K. Acknowledged spousal forms of address predict spousal communication patterns. *Psychologia*, 56, 1, 20-32, 2013. 査読有 .DOI.<http://doi.org/10.2117/psycoc.2013.20>

〔学会発表〕(計 6 件)

1. Yokotani, K. Husband's Impolite Forms of Address for His Wife Predict Intimate Partner Violence against Her. The 14th International Conference on Language and Social Psychology. 2014, Hawaii, USA.
2. Yokotani, K. How children address their parents predicts their perceived parenting. The 16th European Conference on Developmental Psychology, 2013, Lausanne, Switzerland.
3. Yokotani, K. Husbands' forms of address predict spousal violence against women. American Family Therapy Academy's 35th Annual meeting, 2013, Chicago, U.S.A.
4. 横谷謙次. 妻に対する無礼な呼び方は夫から妻への暴力を予測する 日本家族心理学会第 31 回大会発表論文集, 2014.
5. 横谷謙次. 配偶者間の呼び方に基づいた配偶者暴力の予測 日本家族研究・家族療法学会第 30 回大会発表論集, 2013
6. 横谷謙次. 子どもから親への呼び方と子どもの認知する親子関係. 日本家族心理学会第 29 回大会発表論集, 2012.

〔図書〕(計 1 件)

1. 横谷謙次. 家族内呼称の心理学--集団の構造と機能への呼称の関与-ナカニシヤ出版, 2014. 240 頁.

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

6 . 研究組織

(1)研究代表者

横谷 謙次 (YOKOTANI KENJI)
新潟青陵大学大学院臨床心理学研究科・准教授
研究者番号 : 40611611